

# 生涯学習課 NEWSLETTER



福島県文化スポーツ局 生涯学習課

TEL 024 - 521 - 7784

FAX 024 - 521 - 5677

E-mail shougaigakushuu@pref.fukushima.lg.jp

NO.1 H28,12,14

## ニューズレターの概要

このニューズレターは、平成27年度に開催された「全国生涯学習ネットワークフォーラム」の後継事業として、震災からの復旧・復興や地域課題に取り組んでいる県内の関係者等の情報を共有し「学びをひろげ、つなげる、いかす」ため、年に2回発行するものです。

また、皆様方からも、日常的な取り組みや様々な企画のもと実施されたイベント等、生涯学習に関する情報ならどんなものでも結構です。多種多様な情報をぜひ当課までお寄せください。

今後も、互いに情報を共有し合い、継続的な取り組みが推進されるよう積極的につながっていきましょう。

## つながる・続ける交流事業

### 一箕公民館 大熊町教育委員会

昨年の「全国生涯学習ネットワークフォーラム2015福島大会」を契機に大熊町と会津若松市子どもたちの交流事業として企画された「会津板かるた体験」。

今年は継続事業として大熊町教育委員会の「フレンドリー教室」、一箕公民館の「げんき塾」

双方の合同事業「友だちの輪を広げよう大交流会」が11月27日(日)に会津自然の家で開催された。

この合同事業の目的や意義、継続していくことの大切さについて、主催者に話を伺った。



## 同じ時間、同じ目標の共有が大切

大熊町と会津若松市の合同事業は今年で2回目であり、参加者は大熊町6人、会津若松市25人の小中学生だ。

開会式の後、スライドで大熊町教育委員会の「フレンドリー教室」、一箕公民館の「げんき塾」の活動の

様子を紹介した。その後、レクリエーションが始まり、ダンス、班分けゲームと進んだ。班は大熊町、会津若松市の子どもたちが一緒にになり、3つの班ができた。ゲームは、この3つの班で争う。それぞれの班が上位を目指し、ゲームに取り組んだ。ジャンケンゲームをはじめ、いくつかのゲームを楽しむにつれ、どの子も笑顔になり大熊町、会津の枠を超え、自然に同じ班のメンバーの応援にも力が入ってくる。レクリエーションをとおして、子どもたちの絆がまた一つ、つながった。

## つながることで「相互理解」ができる

この事業の主催者の1人、一箕公民館、渡部健司さんに話を聞いた。大熊町と会津若松市の交流会は「八重ちゃんくまちゃん絆会」として大人の交流から始まった。交



交流を深める子どもたち

流会を重ねるたびに親睦が深まり、互いに理解することができた。子どもたちもこのような交流会が必要ではないかと考え、昨年から実施している。「交流会は、『相互理解』が目的であり、何かを一緒に行うことが大切だと感じている。子どもたちには、これからの多様な体験の中で、人とのつながりが持てるようにしてほしい。今日の活動を見ていると、レクリエーションをとおして、大熊町や会津若松市の子どもたちは、笑顔になり、互いに理解し、友だちになることができた。これからも大熊町と会津若松市がつながり、理解していくためにも、このような交流会は大変重要であり、必要である。交流会はこれからも続けていきたい。」と、話す。

## 参加者の感想

普段はなかなか交流できませんが、今日はたくさんの子と友だちになれて良かったです。私は中学生ですが、一箕の小中学生から声をかけてもらって嬉しかったです。会津若松市の子たちに大熊町の様子をスライドで見ていただき、少しでも大熊町のことを知ってもらえたのも良かったです。思います。

(大熊中 1年 女子)

## 未来の町づくりは 若者の力で！ NPO法人 みらいと

「みらいと」は、震災後に発足し、地域の発展や復興に取り組み、地域を拠点に活動している。地域を共感を得ながら、自分たちのまちは自分たちでつくるという意識を高め、様々な事業をおして、住民と行政との協働を進展させ、元気なまちづくりの実現を目指している。

今回、理事長の目黒博樹氏に、新地高校生との交流や「やるしかねえべまつり」成功の秘訣、地域づくり・人づくり等、「みらいと」の取り組みや考え方について話を伺った。

### 高校生の力を新地駅に 「駅カフェ」オープン

新地高校生と「みらいと都市環境事業部」が中心となって「駅前プロジェクトin新地高校」を始めた。ワークショップには、放課後の時間に高校生約20名が参加している。

12月10日の常磐線再開通に向け、高校生たちは新地駅前に何があれば



話し合いをする新地高校生

活気が出るのかを話し合ってきたが、計画当初は、理想を話すことが多かった。やりたいこと、楽しいこと等が優先になりがちであったが、その中からヒントとなることもたくさんあった。話し合いを重ねる毎に現実味をおび、最終的に高校生が取り組む駅カフェは、「ワッフル」「コーヒー」「ココア」の無料配布に決まった。メニュー



高校生には、「駅前プロジェクトin新地高校」だけでなく、様々な体験を通して人間として成長し、新地に対する思いや地域愛を育んでほしい。若い人の力、高校生の力が町づくり、地域づくりに自然につながる事ができればと考えている。

### やるしかねえべまつり 来場者数 三万六千人

今年8月6日に新地町総合公園にて「第6回やるしかねえべまつり」が盛大に開催された。来場者数は過去最高の三万六千人。子どもプールやカブトムシ館、飲食ブース、夜は花火やコンサートと内容盛りだくさん。まつりを始めてから6年。ここまで成長させるには若手育成や、新組織の立ち上げなど並大抵の努力や苦労ではなかったという。その甲斐あって今回はこれだけ集客できた目黒氏は話す。そこで今回の「成功の鍵」を尋ねた。

「1つ目は各ブース毎に担当団体を決め、担当ブースに責任を持つこと。2つ目は夜のプログラムのアーティストの選定と花火。世代に関わらず楽しめる楽曲を選び、花火で場を盛り上げる。」

3つ目は、広報の工夫。チラシ配布や新聞、テレビのローカル番組での広報などを行った。特に反響が大



やるしかねえべまつり  
の様子  
(子どもプール)

きかったのはSNSによる情報発信で、書き込みや問い合わせ全てに返信をした。小さな努力や工夫が不可欠。」と、教えていただいた。

### 人材を生かし、 魅力を発信する

「みらいと」では、この他にも子ども育成事業として「キッズ耕せプロジェクト」や「座禅会」、「被災高齢者住宅体操教室」等も行っている。

目黒氏に話を聞いていると、新地町に対する思い、新地町を自分たちの力で変えていくんだ、という意気込みがひしひしと伝わってくる。

「一番大切なのは自分たちの地域に関心を持つこと。地域をどうしたいのか、どう変えたいのか」という意見や考えを持つこと。人任せではなく自分は「何をすれば良いのか」「何ができるのか」ということを常に考え、実行する人を育てることが大切。だから『みらいと』では、子どもを中心とした人材育成に力を入れている。また、『駅前プロジェクト』『やるしかねえべまつり』などをきっかけに『新地って楽しそうだな、いいところだな。』と思ってもらえるような企画をし、魅力ある地域にしていきたい。そのためにも人材を生かし、魅力を発信していきたい。」と語る。

「みらいと」の今後の活動に期待していききたい。